

青森



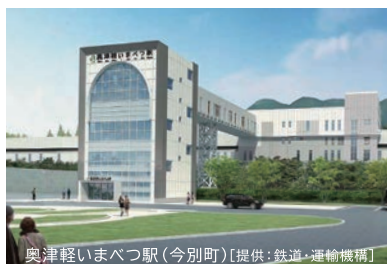
青森県知事 三村 申吾

時間がという時間距離は、本県と道南地域との一体的な交流経済圏域の形成にとって大きな障害となっていました。それが今、北海

3月26日、北海道新幹線新青森・新函館北斗間が開業します。平成17年5月の着工以来10年余の歳月を経て、いよいよ新幹線が青函トンネルを通過して津軽海峡を渡り、北の大地に到達します。北海道民の皆さん、特に道南地域の皆さんの期待はさぞかし大きいものと思います。と同時に、3度目となるこの開業は、本県にとっても非常に大きな意味を持つ開業です。竜飛岬や大間町からは対岸の北海道が、天気の良い日にはそ

の家々までもが手に取るように見えます。幅約20キロメートルの津軽海峡は昔から「しよっぱい川」と言われ、縄文の古より人々はこの川を渡って北海道との交易・交流を続けてきました。また、青函地域は多極分散型国土形成を目指して昭和62年に策定された国の第四次全国総合開発計画に基づき、札幌圏と仙台圏の中間に位置する第三の極となるインターブロック交流圏に位置付けられていました。しかし、青函連絡船で4時間、青函トンネルが開通しても2

時間という時間距離は、本県と道南地域との一体的な交流経済圏域の形成にとって大きな障害となっていました。それが今、北海



これらの広域交通網を活用すると、航空機を利用して訪れた人々が新幹線やフェリーを利用して本県と道南地域の間を気軽に移動することが可能となります。例えば、函館と弘前での洋館巡りや函館と八戸でのイカの食べ比べ、湯の川と浅虫

道新幹線の開業により新青森・新函館北斗間が約1時間で結ばれ、両地域間での通勤や通院も可能となることで、経済的な交流拡大に加えて両地域に暮らす人々の内に精神的な一体感が醸成されていく新たな時代が到来したのです。さらに、この地域には東京や仙台に直結する東北・北海道新幹線に加えて、三沢・青森・函館の3つの空港から東京や大阪、名古屋、札幌の大都市圏や諸外国との間に航空路線が開設され、函館港と青森港、大間港間ではフェリー航路が運航されています。

これらの広域交通網を活用すると、航空機を利用して訪れた人々が新幹線やフェリーを利用して本県と道南地域の間を気軽に移動することが可能となります。例えば、函館と弘前での洋館巡りや函館と八戸でのイカの食べ比べ、湯の川と浅虫

歴史と文化の香る青森の魅力を、積極的にPRしていきたい。

青森県と道南地域は、古くは縄文時代から交流が盛んで、ひとつの文化圏をつくってきました。青森商工会議所は函館商工会議所と連携し、「会員事業所パートナーシップ支援事業」を行っており、青函の企業がビジネスパートナーとしての協力関係を築くことでいくつもの新商品が誕生しました。

また、函館市から始まった「バル街」は現在、青森市や弘前市をはじめ県内各地で行われており、地域の活性化はもちろん、若い人たちの出会いの場にもなっています。新幹線開業後は、青森・函館の各バル街をはしごするこ

とも夢ではないので、海峡を越えて交流の輪が広がっていけば、いっそう盛り上がるのではないのでしょうか。

現在、世界遺産登録を目指して取組を進めている「北海道・北東北の縄文遺跡群」も、開業を機にさらに青函連携を強めて推進していきたいと思えます。今年7月から「青森県・函館DC」が実施されますが、津軽海峡圏は、陸・空・海の交通手段が多岐に渡り、非常にバラエティー豊かな旅が楽しめることを売りに、お互いの地域の魅力を最大限に生かした観光商品を作りたいと思っています。

本県の最大の魅力は、県内各地のねぶた・ねぶた、三社大祭などの祭りや津軽三味線などの郷土芸能、三内丸山遺跡や弘前城など、歴史と文化が香る場所であるということ。函館を訪れる国外観光客にも、本場の文化に触れることのできる強みを積極的にPRして集客につなげていきたいですね。

地元の魅力にはなかなか気付きにくいものですが、県民一人ひとりが、もっと胸を張って青森を自慢しても良いのではないのでしょうか。青函それぞれの地域が地元を見つめ直し、一緒に魅力を発信していけたらと考えています。

【インタビュー】
青森県商工会議所連合会会長
わか い けい ち ろ う
若井 敬一郎さん



芦野公園のさくらと津軽鉄道



青森市ベイエリア